

(東京国際映画祭事務局同時発表)

平成19年9月19日

文化庁

「第4回文化庁映画週間 - Here & There」について

文化庁では、平成15年度より日本映画の海外発信や人材育成の支援を行うなど様々な観点から日本映画・映像の振興施策を進めてきています。昨年は21年ぶりに興行収入で邦画が洋画のシェアを上回り、公開本数も3年連続増加を続けるなど、数字の上ではかつての活況を取り戻しつつあります。

今回、4回目となる「文化庁映画週間」は、「映画」をより発展させるための人材育成のあり方や、地域における映画文化の醸成、そして、次世代を担う子ども達と映画のあり方などについて、新たな展開を探ります。本事業は、「映画」に関する様々な立場の人々が集まる「第20回東京国際映画祭」の併催事業であるとともに、今年度から始まる「JAPAN国際コンテンツフェスティバル」のオフィシャルイベントとなります。

1. 会期 平成19年10月20日(土)～10月25日(木)
2. 場所 六本木ヒルズ(港区)、Bunkamura(渋谷区)
3. 主催 文化庁
4. 共催 財団法人日本映像国際振興協会(ユニジャパン)
コミュニティシネマ支援センター
全国フィルム・コミッション連絡協議会
5. 実施事業の概要
別紙参照

文化庁文化部芸術文化課

課長 清水 明(内2822)

担当補佐 山崎 英司(内2062)

担当係長 中村 夢隆(内2083)

【代表】03-5253-4111

【直通】03-6734-2083

(別紙) 実施事業の概要

平成19年度(第5回)文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会・・・P4
(主催/文化庁)

【贈呈式】

日程：10月20日(土)

会場：六本木ヒルズ「グランドハイアット東京」3F

優れた文化記録映画作品を顕彰する文化記録映画部門及び顕著な業績を挙げた者を顕彰する映画功労表彰部門の贈呈式を実施します。

【受賞記念上映会】

日程：10月21日(日)

会場：Bunkamura「ル・シネマ1」

文化記録映画部門受賞3作品の受賞記念上映会を実施します。

第4回世界映画人会議 I

(主催：ユニジャパン/共催：文化庁)

日程：10月23日(火)

会場：六本木ヒルズ「アリーナ」

世界各地で映画制作に携わる映画人は、その所属する国や地域の文化・伝統に基づき、表現者としての独自のスタイルを発見していきます。東京国際映画祭に集う各国の映画人が自らの映画を紹介するとともに、どのように自らのスタイルを発見してきたかについて意見を交わします。

第4回文化庁全国映画祭コンベンション

(主催：文化庁/共催：コミュニティシネマ支援センター)

日程：10月25日(木)

会場：六本木アカデミーヒルズ49「オーディトリウム」

近年、映画館や映画祭、文化施設において、子どもたちに映画の魅力を伝えることを目的とした事業が増えています。また、学校教育においてもメディア教育や映像教育が注目されています。そこで、海外の優れた事例を参照しながら日本における映画教育の現状と課題について議論します。

第4回世界映画人会議Ⅱ

(主催：ユニジャパン／共催：文化庁)

日程：10月25日(木)

会場：六本木アカデミーヒルズ49「スカイスタジオ」

近年、日本のアニメーションは世界的な注目を集めていますが、すでに評価の高い長編アニメーションばかりではなく個人作家が中心となる短編アニメーション分野の成長も見逃せません。優れた個人作家を輩出している海外の事例を紹介するとともに、我が国の短編アニメーション分野の今後のあり方を議論します。

第5回文化庁 全国フィルムコミッション・コンベンション

(主催：ユニジャパン／共催：文化庁、全国フィルム・コミッション連絡協議会)

日程：10月24日(水)

会場：六本木アカデミーヒルズ49「オーディトリウム」

歴史・文化遺産を題材にそれらを有する地域での撮影がどのように行われているかについて、国内外の報告や事例を聞き、歴史・文化遺産の保存・保全とフィルムコミッションの撮影協力をどのように両立させるのかを考えます。

(※「ジャパン・ロケーション・マーケット2007」との共同企画)

(参考) 第20回東京国際映画祭開催概要

期間：平成19年10月20日(土)～10月28日(日)9日間

会場：六本木ヒルズ、Bunkamura等

※文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会の詳細

平成19年度（第5回）文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会

文化庁では、我が国映画の向上とその発展に資するため、文化庁映画賞として、優れた文化記録映画作品（文化記録映画部門）及び顕著な業績を挙げた者（映画功労表彰部門）に対する顕彰を実施しています。

文化記録映画部門には、9作品の申請があり、選考委員会における審査結果に基づき、次の3作品（文化記録映画大賞1作品、文化記録映画優秀賞2作品）を受賞作品として決定しました。各作品の制作団体に対して、文化庁映画賞として賞状及び賞金（文化記録映画大賞200万円、文化記録映画優秀賞100万円）が贈られます。

また、映画功労表彰部門についても次のとおり5名の方を受賞者として決定し、それぞれ文化庁長官から文化庁映画賞が贈られます。

【贈呈式】

日 時 平成19年10月20日（土）19：00～
会 場 六本木ヒルズ「グランド ハイアット 東京」3F タラゴン

【受賞記念上映会】

〈文化記録映画部門受賞作品〉

日 時 平成19年10月21日（日）
「ひめゆり」
「有明海に生きて 100人に聞く、海と漁の歴史と証言」
「プライド in ブルー」
会 場 Bunkamura「ル・シネマ1」

【平成19年度（第5回）文化庁映画賞受賞一覧】＜文化記録映画部門＞

文化記録映画大賞	作品名	ひめゆり
	製作団体名	有限会社 プロダクション・エイシア 共同製作：財団法人沖縄県女師／ －高女ひめゆり同窓会
文化記録映画優秀賞	作品名	有明海に生きて 100人に聞く、海と漁の歴史と証言
	製作団体名	株式会社 イワプロ
	作品名	プライド in ブルー
	製作団体名	株式会社 バイオタイト

（作品名50音順）

【文化記録映画部門贈賞理由】

『ひめゆり』 監督：柴田 昌平 2006年／130分

沖縄での苛烈な戦争に生きたひめゆり学徒隊の人びとが、長い沈黙の時間を経て、その重い口を開いた。映像は、彼女たちの戦争の経験に正面から向きあい、また、一人一人の生きてきた戦後の現実を、真摯に受けとめ、その言葉を丹念に追いつける。13年に及んだ撮影の歳月は、異なった映像のフレームを混在させ、時の重みを加える。そのなかで、粘り強く映像をまとめあげ、証言者の思いと現実に応えようとした姿勢は高く評価される。＜原田 健一＞

『有明海に生きて 100人に聞く、海と漁の歴史と証言』 監督：岩永 勝敏
2007年／120分

昨年の第4回文化庁記録映画大賞を受賞した、「今、有明海は 消えゆく漁撈習俗の記録」を、別の角度からアプローチしたというべき記録映画の力作だ。100人ももの人びとに聞き込みをしたその労力、また取材力もさることながら、地球温暖化にも通じる有明海の環境の悪化を危惧する作り手の情熱が丹念に描かれている。多くの漁業者が撤退する現状、密漁など、多角的に現実を捉えた視点も素晴らしく、ここに畏敬の念を送りたい。＜寺本 直未＞

『プライド in ブルー』 監督：中村 和彦 2007年／83分

2006年夏、FIFAワールドカップの余韻が残るドイツで、知的障害者による通称「もうひとつのワールドカップ」INAS-FID サッカー世界選手権が開かれた。ジャパンプルーのウェアで世界に挑んだハンディキャップ・サッカー日本代表の活躍ぶりを追って、ピッチに立つ誇りと嬉しさ、負けた悔しさ、選手同志の信頼、家族や周囲の人びとの思いなどを見事に描いた秀逸なドキュメンタリーである。＜山本 克己＞

※＜ ＞内は執筆した選考委員名

＜映画功労表彰部門＞

氏名	年齢	分野
岡安 肇 (おかやす はじめ)	70	映画編集
黒澤 満 (くろさわ みつる)	75	映画製作
鍋島 惇 (なべしま じゅん)	70	映画編集
安本 東済 (やすもと とうさい)	79	映画機材
山田 宏一 (やまだ こういち)	69	映画評論

(敬称略・氏名50音順)

【映画功労表彰部門受賞者功績】

岡安 肇

大映東京撮影所を経て昭和33年日活撮影所に入る。同46年「恋狂い」で技師となる。同49年フリーとなり、同55年岡安プロモーションを設立。カンヌ国際映画祭でパルムドールを受賞した今村昌平監督の「楢山節考」(同58)で編集を担当、以降「女衞」(同63)「黒い雨」(平成元)「うなぎ」(平8)「赤い橋の下のぬるい水」と仕事を続けた。アニメーションではテレビ・映画で「ドラえもん」「クレヨンしんちゃん」なども手がけている。また、日本映画学校で専任講師を務めるなど次世代の育成にも力を尽くしている。日本アカデミー賞最優秀編集賞(平2)同優秀編集賞(同10)を受賞。

黒澤 満

昭和30年日活に入社、興行、宣伝を経て同45年映画本部長室に異動、製作統括、俳優の育成等に尽力する。同46年企画製作部長、同48年撮影所長に就任。初期日活ロマンポルノの時代の製作の舵取りを行う。同52年日活を退社、同年秋、東映ビデオにプロデューサーとして入社、同年12月スタートした東映セントラルフィルムにおいて製作を始める。第一回作品は松田優作主演、村川透監督の「最も危険な遊戯」(同53)、油の乗り切った中堅、意気の良い新人監督と組み、アクションを中心としたフレッシュな作品群を製作した。同50年代後半に、澤井信一郎、根岸吉太郎、井筒和幸、森田芳光、崔洋一、大森一樹など現在の日本映画界を牽引している監督たちに活躍の場を与えた。

主な作品に「蘇える金狼」(村川透 同54)「探偵物語」(根岸吉太郎 同58)「Wの悲劇」(澤井信一郎 同59)「それから」(森田芳光 同60)「身も心も」(荒井晴彦 平9)「犬、走る」(崔洋一 同10)「時雨の記」(澤井信一郎)「GO」(行定勲 同13)等。

鍋島 惇

昭和 33 年日活撮影所製作部編集課に入る。同 46 年「団地妻 昼下がりの情事」で技師となる。専属としてロマンポルノを編集、田中登監督作品などを多く手がける。他にも「華麗なる一族」（昭 49）「金環蝕」（同 50）「不毛地帯」（同 51）「あゝ野麦峠」（同 54）など一連の山本薩夫監督の大作や佐藤純弥監督「野生の証明」（同 53）後藤俊夫監督「マタギ」（同 57）原一男監督「ゆきゆきて、進軍」（同 63）「全身小説家」（平 6）など話題作で腕をふるっている。日本アカデミー賞優秀編集賞（同 63）受賞。現在、東京工芸大学講師。

安本 東済

昭和 30 年頃より映画カメラのレンタル業を開始、事業を拡大し同 46 年三和映材社を設立。以降長年にわたり、映画フィルム撮影機（パナビジョン）はもちろん、ビデオ機材、照明機材、特殊機械等々あらゆる映像関係機材の輸入、制作、開発を行い撮影現場に提供し、技術者からあつい信頼を寄せられ今日に至っている。また同 50 年よりカメラマン志望者を機材に習熟させるために同社内に独自の研修制度を設け、後進の育成にも尽力した。撮影所の人材育成機能が崩壊したその時期にあって、その代替を果たしたこの研修制度は高い評価を受けている。現在、同社取締役会長。

山田 宏一

昭和 39 年から 42 年にかけてパリに在住、この間「カイエ・デュ・シネマ」誌同人となる。帰国後、映画に対する深い見識とファンとしての愛情に基づく評論、翻訳を数多く執筆するとともに、多彩なインタビュー活動など幅広く活躍し、読者に深い感銘を与える。トリュフォーやヒッチコック監督などの欧米作品はもちろんのこと、日本映画を柔軟な視線で見つめ直し、マキノ雅広監督作品の魅力を再評価するなど、日本映画に対する評言も多く、映画評論の世界に大きな貢献をした。近年は著書「何が映画を走らせるのか？」（平 17）で展開した縦横無尽な映画史を、青山学院大学や学習院大学で講じている。平成 3 年に「トリュフォー、ある映画的人生」で第一回 Bunkamura ドゥマゴ文学賞を受賞。

主な著書に「友よ映画よ、わがヌーヴェル・ヴァーグ誌」（昭 53）「森一生映画旅」（山根貞男と共著 平元）「山田宏一の日本映画誌」（平 9）、訳書に「ローレン・バコール自伝 私一人」（昭 59）「映画術 ヒッチコック/トリュフォー」（蓮實重彦と共訳）

<参考>

平成19年度文化庁映画賞選考委員

【文化記録映画部門】

寺本 直未	映画評論家
原田 健一	映像メディア研究家
山崎 博子	映画監督
山名 泉	社団法人日本映画テレビ技術協会理事
山本 克己	映像制作アドバイザー・映像評論家

【映画功労表彰部門】

荒木 正也	協同組合日本映画製作者協会事務局長
兼松瀬太郎	協同組合日本映画撮影協会理事長
白鳥あかね	協同組合 日本シナリオ作家協会理事
新坂 純一	社団法人日本映画製作者連盟事務局長
山根 貞男	映画評論家

(敬称略・氏名50音順)

(問合せ先：文化庁 TEL 03-6734-2083)